

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	森(加納) 志津 人間発達科学専攻2016年度生		論文題目	幼小接続期における共同的な「かく」学びに関する研究
審査委員	主 査:	浜口 順子 教授	インター ネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	小玉 亮子 教授		「否」の場合の理由
	副 査:	刑部 育子 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	松島 のり子 講師		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
審査委員:	辻谷 真知子 助教	<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている		
学位名称	博士 (社会科学)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Education)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

**【論文内容の要旨】** 本論は、幼小接続期(5歳児クラスから小学校第1学年)における「かく」学びについて、共同性の視点から考察した論文である。国語教育において、「読む」「書く」「話す」「聞く」の4つの言語活動のうち「書く」学びが子どもにとって最も困難なものと認識されていることを問題の基底におき、「かく」行為について文字を書くだけでなく線のひっかけや図や絵を描く行為をも含めた概念としてとらえ、幼小接続期の多様な「かく」行為が一個人に閉じたものとして起るのではなく、周囲の人との共同性のもとに書きことばへの学習へと展開する生態を記述し、その意味を追究することを目的としている。共同性概念に関して、書きことばの発生は社会的相互作用に根ざしていることから「ホールランゲージ」アプローチを提唱したグッドマン、および対話的熟考による思考の伸長に注目し「探求の共同体」概念を提唱したリップマンの理論を分析枠組みとした。調査方法として、Q大学附属幼稚園および同附属小学校をフィールドとして約5年間にわたる参与観察を行い、手書き・ビデオ記録をとり、非言語的行為も含めた文字データを作成、エスノグラフィーの手法により事例を記述した。その結果、幼小接続期における「かく」行為の生態を次の4つのカテゴリーに整理し意味づけを行った。第1の「自然なかく遊びと意図的なかく学び」では、幼稚園保育の中の「かく遊び」が小学1年の授業の中で「かく学び」へと変化することが示された。第2の「相互性から生まれる意味の世界」では、一人の子どもの縦断研究を通して、口述筆記と推敲が共同の場を通して行われるありようが示された。第3の「ケアと探求」では、幼児期の「かく」に示されたものへのケア、小学1年の「かく」に示された人へのケアが特徴的に示された。第4の「かくことに関する国語科的事項の習得」では、児童と教師の共同的な探求をとおして書きことばのもつ社会に通底するルールを主体的に学ぶ姿が明らかとなった。

これらの生態的特質を総合すると、幼小接続期の「かく」行為の精緻化、共同性、ケアに基づく探求、口述と記述の融合、という4つの継続性と同時に、「教師の教育的意図である文字文化の伝達」「新しい共同性の創出」「公共化する身体と言葉」という段差性も明らかとなった。以上の幼小接続期の「かく」行為に関する考察を通して、(1)身振りや語りを交えた「かく」が共同性を育て享受する過程となり、ことばの役割や機能を学ぶと同時に人生を分かち合う関係を育てること、(2)「かく」行為が、周囲の人やものとの関係を尊重し再確認するケアと分かちがたいものであること、(3)「かく」ことを楽しみ喜びを共有し主体的に生きる子どもの姿から、国語教育において子どもが書くことに困難を感じる人が多いとされる現状を打開する方法が示唆された。今後の課題としては、教師側の「かく」との関わりや教育の方法にも着眼し多様なフィールドにおける調査をおこなっていく必要がある。

**【審査の過程】** 2023年6月14日に審査委員会が設置され、6月22日第1回審査委員会が開かれた(Zoomシステムによるオンライン)。論文趣旨、事例の提示方法および内容的充実度について評価されたが、序章から第1章にかけての構成、共同性・発達等の基本概念に関する記述の曖昧さ、先行研究の検討方法、引用文献の記載法、翻訳の誤り、結論の不十分さ等が指摘された。それに対応した修正論稿が7月末に再提出され、8月8日第2回審査会を行った。前回の指摘部分についてはかなり改善されたが、主タイトルと内容の矛盾が生じたためそれを適正化すること、英文タイトルの表現、文献の記載方法や表の位置や番号の打ち方など形式的な誤り等について検討・修正の必要が指摘された。8月12日第3回審査会をもち、前回の指摘事項について適正に修正されていることを確認した。8月31日(木)14時～15時半、博論公開発表会がオンラインにて開催され、5名の指導教員と学位申請者本人以外16名の来場があり、40分間のパワポによる論文概要の報告後、数名の来場者から出た質問に対して適切な応答がなされた。発表会後に審査委員会による最終審査があり、本論文が、博士(社会科学)、Ph.D. in Educationの学位に相当すると判断され、合格とした。